
書評「貧困からの自由 ——世界最大の NGO・BRAC とアベッド総裁の軌跡」

(イアン・スマイリー著、笠原清志監訳、立木勝訳、
明石書店、2010 年、定価 3,800 円)

笠原 清志

KASAHARA Kiyoshi

本書は、バングラデシュという一国を超えてアジア・アフリカ諸国への南南援助を独自に行うまでに発展した BRAC の理念と活動の軌跡をたどったものである。UNICEF 事務局長、故ジェームス・グラントが述べているように、「バングラデシュの小さな非政府組織 (NGO) から世界最大級の最も成功し、最も尊敬される途上国開発機関へと成長していった BRAC」の活動は、2000 年代に入っても、静かに、そして着実に成果を上げ世界の貧困地帯で、そして自立を求める人たちがいる地域へとその活動を展開している。そして、2001 年には BRAC 大学を設立し、2002 年以降はアフガニスタンへ約 450 名ものスタッフを派遣し、アフガニスタンの戦後復興の先頭に立っている。またスリランカの津波後の復興支援援助のプログラムではその活動が世界に紹介され、今日ではコンゴやタンザニア等のアフリカ諸国への医療・教育・農村復興、その他の自立支援活動を展開している。

NGO のあり方は、其々の社会の歴史や社会構造、そして政府や市民社会の在り方から切り離して論じることはできない。バングラデシュの場合、BRAC が学校に行けない、あるいはドロップアウトしてしまった 135 万人もの児童の教育をノンフォーマル教育として行っていることはよく知られている。その児童数の多さと村々にまで作られた BRAC の教室、そしてそこで働く教師たちの情熱に圧倒されてしまうことがある。日本などでは、政府や行政が、教育、医療、そして福祉といった分野で中心的な役割を担っているのが一般的である。しかし、バングラデシュでは政府や行政の力が弱く、BRAC のような巨大な NGO が世界の援助機関や財団からの援助を受けて、事実上、政府の役割を一部代替しているのが現実である。しかし、BRAC やグラミン銀行のような組織にとって、政府やイスラーム原理主義グループとの距離の取り方は微妙で、その距離の取り方において何回かの試行錯誤のプロセスがあったことが記されている。また、マイクロクレジットや女性のエンパワーメントは、経済力の向上、あるいは意識の変革を通じてイスラーム社会における伝統的な女性の社会的地位を変化させることになる。イスラーム原理主義グループからみれば、BRAC やグラミン銀行を

反イスラーム的団体として攻撃することも可能となる。本書は、貧困と開発、共生と自立、NGOと政治システム、イスラーム社会におけるマイクロクレジットや女性のエンパワーメント、そして貧困層と階層分化といったテーマを考える際にも格好の素材を数多く提供している。〈本著、「監訳者あとがき」を参照のこと〉

BRACの活動とその組織の在り方については、日本では、キャサリン・H・ラヴェルの「マネジメント・開発・NGO」(Breaking the Cycle of Poverty : The BRAC Strategy, 久木田由貴子・久木田純訳、新評論、2001年)が紹介されている。日本に紹介されているBRAC研究はそれほど多くないが、キャサリン・H・ラヴェルの著書は「学習する組織」としてBRACの特徴をとらえ、そのプログラムを具体的に紹介することによって読者のBRAC理解を助けてくれる。イアン・スマイリーもこの本を高く評価しながら、長期にわたる調査研究と膨大な数のインタビューを積み上げることによって本書を書きあげている。その意味で、本書はBRACについての知のプリズムのようなものである。光の角度とそれを受け止める本書の各部分によって、読者はいろいろな知を受け止めることが可能である。

昨年、グラミン銀行のムハマド・ユヌス総裁が政府によって解任された。グラミン銀行は国立銀行であり、国家公務員の定年をはるかに超えたユヌス氏はその職にとどまれないということであった。また、外国企業とのソーシャルビジネス、あるいは外国からの援助資金の不正使用との疑惑も政府によって囁かれている。かつて、大統領選挙の際に支持者によって出場が準備され、ユヌス総裁も一時、真剣に検討した事実を政治家たちは忘れてはいなかったのである。バングラデシュのような国において、NGOと政治システムとの関係は、いつの時代でも難しいものである。それは、BRACやアベッド総裁にとっても例外ではなかった。NGOと政治システムとの問題は、民主主義が十分に定着していない国において、常に不透明な部分を残しながら当面は解決されないであろう。以上の点を考える際にも、本書は多くの問題点を示唆している。